

## B・J・Bettelheim「約翰伝福音書」の国語学的研究

### —異文化（言語）受容の言語の種々相を中心に—

春日 正三

#### はじめに

本書は俗に、琉球語訳「約翰伝福音書」と言われている資料である。

「琉球語」という名称について、「南島語」「琉球語」「沖縄語」「首里語」「南島方言」「沖縄方言」「琉球方言」と様々にいわれている。

この地域を歴史的には、江戸時代の新井白石が「南倭」と書いている。その後英国人のB・H・Chamberlainの『琉球文典及語彙』（明治28年・1895年）以来、「日本語とは姉妹語関係にある」ということから「琉球語」といわれるようになった。

大正期から昭和初期にかけて盛んになった日本の方言研究の生みの親、東条操が「琉球語は、その音韻と語法を調べて見ると日本語の一方言である」<sup>1)</sup>と結論づけられた。

しかし、金城朝永は、「学術用語としては、これを冠して『琉球語』とするのが、いろいろの点で他に優る」<sup>2)</sup>とされて、「琉球語」がよいといわれたのであったが、琉球・石垣市出身の宮良当杜が「私が60年前琉球に生れ、40余年間国語研究にひたり、そのうち30年を方言の実地調査研究に没頭した結果からすると、琉球諸島の言語は日本語中の一方言であるという結論を得た」<sup>3)</sup>とされてから、「琉球方言」というのが学界の一般的呼称となった。

がしかし、ベッテルハイムの「約翰伝福音書」に現われる語形を見るとその出自や語の構成が、いささか複雑なので直ちに「琉球方言」であると

は言い難い。そこで今ここでは前近代的呼称ではあるが、一般的俗称の「琉球語」ということにする。

#### I

ベッテルハイム「本名をベルナード・ジャン・ベッテルハイム (Bernard Jean Bettelheim) といい、1811年6月ユダヤ系ハンガリー人としてプレスブルクに生れ、9歳のころにはヘブライ語、ドイツ語、フランス語の読み書きが出来たという。早くから医学を学び、ブタペスト、ウィーン等欧州大陸の大都市で医業の修行をし、1836年9月(25歳)には、イタリアのパデュア大学から医学博士の学位」が授与されている。

ベッテルハイムの医学・医術の知識は確実で、技術も医道もじゅうぶんに具備していた人であったという。治療に際して、治療代が払えない人達からはその報酬を求めなかったといわれている。

ベッテルハイムの施術の実例として、「『若狭町の某家に死人が出て一家の者や親戚の者が死体を囲んで号泣して居る処に街頭伝道に出たベ博士が通りかかり、悔みのつもりで訪問し、ベ博士が死体を検べると心臓は動いているので一時の窒息である事に気が付き人口呼吸を施して蘇生せしめたので、今までの悲嘆にくれていた人々を驚かしたということでもあります。こうしてベ博士の医術は死人も蘇生せしめることが出来ると大評判になったと言うことです』という島での治療の生活から、彼が伝道に従事するかたわら、病苦に悩んでいる

人々、特に貧民達を見ると躊躇もなく治療看病につとめたいらしい。泰西の医術についてはいささかの知識もない琉球島民達の目には奇跡にうつたのである」<sup>4)</sup>

ベッテルハイムは沖縄に上陸後一年有余は、病人の治療も出来、島民達と親しく接することが出来て、ベッテルハイムの信念に従った望み通りの生きている「琉球語」を聞くことが出来たようであるが、次第に薩摩（日本）ならびに琉球政府から遣わされた間者の妨害にあってそれが出来なくなったという。「ベッテルハイムが強いて家庭訪問をすると、後難を恐れて重症患者の口からさえ『来てくれるな』と懇願された」「沖縄に蔓延する風土病、長い雨期の際の病人続出の状況、沖縄の非衛生的環境等にも彼の筆は及んでいるが、貧しい無知な一般庶民達に対する同情が溢れていて読む人の胸を打つ」と記されている。

ベッテルハイムは、沖縄に渡った最初のころは、数々の束縛の中でもいくらか自由に、一般庶民の中に入って生きた「琉球語」の記録をとったようである。それだけに官製の記録とは異った、「琉球俗語」であった。この俗語的琉球語が、「島ぐち」「大和ぐち」の混入された造語となって、複雑な語形を構成している。

「沖縄の女は、身内の者の死後3年間は墓参の度に声を張りあげて哭いた。伯徳令は護国寺、辻原墓地の近くに住んでいたから、この泣き声をきくと何度でも墓地に駈けつけて、イエー泣くな惜けー。上帝の見ちよみせんどー。上帝の側んかい住ちやうさ。上帝の見ちよみせーさ。泣くな惜けー。(爾。泣く勿れ。神は見給へり。死者は神にのみ帰れり。神は見給うなり。悲しむなかれ)ということばをかけて彼等を慰めた」とある。

宗教家として当然の行為でもあろうが、民衆の為に、民衆と共に苦しみ・悲しみを分かち合うというベッテルハイムその人の人柄が偲ばれる記述である。

ベッテルハイム（他の宣教師達も同じ）が、神の教えを伝えるのにふさわしい国として、琉球の地を選んだのは、ベッテルハイム自身が、イギリス海軍伝道会所属の宣教師として就任したことが大きな要因ではあったろうが、当時の琉球が、歴史的にも社会的にも、宗主国とされた日本の鎖国政策という閉鎖的特殊な政治的環境下にあって、人間性開放という必然的世の流れに逆行させられる、純朴な琉球島民に対し、己れ自身に神から授けられた社会的使命と意識したのではないだろうか。

ベッテルハイムがこのように考えたのは、これまでに記された琉球に関する文献も大いに作用したものである。このことはベッテルハイムが後年アメリカに渡って、当時収集した琉球に関する記録を売りつけようとした矛盾的行動（現実とは異なる認識に基づいた）の遠因にもなったと推察される。

文化13年（1816年）に来島したアルセス号の乗務員フィッシャー（Fisher）は「われ開帆の期すでにさだまりて9月26日。琉球人祭服して寺におもむき。犠牲を神に供し。諳厄利亞人を加護し。つゝがなく本国へかへらしめんことをいのれり。すでにひらけしほかのくにの。いつはりてなすところの。別離の情よりは。よく心にてつしてかなしかりき。此質朴の善心より。いづる所なれば也。祈おはりて。別をなさんとて。わが舶にきそひ来りぬ。一中略一わが舶すでにさりし後も。ひさしく船中より手をあげて。其情しらしめり。われすでに南方へむかひおもむきしに。順風にて。たゞちに此島はみえずなりにけり。しかれども此土俗の深切と情の厚きは。わが諸人の心に。ふかくかんじ。恩としたふとむなり。」<sup>5)</sup>

とあるように、この島の人が異国の人々にいかに親切であったか、今も変わりなく続いている。質朴の善心より出た、形式（いつはり）でない別離に際しての土俗の厚き情けは、フィッシャー達

船員だけの体験ではなかったろうと思う。かねがね領土拡張の政治的国策と探検を好む西洋人への情報となっていたと思われる。

さらに、ベッテルハイム（だけではなかったろうと思う）は、沖縄上陸に先立って、パーシル・ホール大佐の「朝鮮西海岸及び大琉球島探検航海記」(Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea, and the Great Loochoo Island by Captain Basil Hall. 1818) の「the Great Loochoo Island」が独立国としての主権を持っていたと思っていたのではないだろうか。このような当時の情報から琉球を去って後、ベッテルハイムは己れの「琉球語訳聖書」や「英琉辞典」が、アメリカ政府に買ってもらえなかったことを不思議に思ったのではなかろうかと、私には思えてならない。

私は先年(1983年)、台湾山地族の言語調査をする機会があった。その際本島の平地ならびに山地だけではと思い「小琉球」[sjo : rju tʃu : ]に渡ったことがある。この「小琉球」へは台湾島の西南に位置する港町高雄から、高速艇で45分の所にある。今ここの「大琉球」と台湾の「小琉球」とがどのような歴史的関わりを持っていたのであろうか。興味をそそる問題である。次回の課題である。

ベッテルハイムは、1845年琉球海軍伝道会から琉球派遣宣教師として任じられ、同年の9月英国のポーツマス港を出帆し、1846年1月香港に到着、同年5月琉球那覇港に入港する。香港では英国商務局首席通弁官として着任していたギュツラフ家に滞在する。ギュツラフ家では一家揃っての大歓迎で、船中で誕生したベッテルハイムの長子の名付親にもなったという。当時香港やマカオには、日本国の鎖国という国内の政治情勢から、漂流した日本人は日本に直ちには帰れずに香港・マカオに集められて留まっていた。ギュツラフはこの漂流日本人から日本語を学び、聖書の日本語訳を作

成していたのである。その果実が世界で初めての日本語訳「善徳纂 約翰福音之伝」である。

ベッテルハイムは、ここギュツラフ宅でこれからの新しい布教の地、琉球でのキリスト教伝道について様々な知識や技術、知恵を身に着けたということは容易に想像される。ギュツラフの「約翰福音之伝」を始めとして、漢訳聖書も読んだであろう。ベッテルハイムは漢籍の知識も相当に深かったといわれている。

ここでの知識や知恵が、琉球で体や心を病んでいる人達への施療や接嘱となったものと思われる。特にギュツラフの「約翰福音之伝」は、ベッテルハイムの「琉球語訳約翰伝福音書」の手本になったものである。

## II

ギュツラフは「約翰福音之伝」(善徳纂)とあるが、ベッテルハイムは「約翰伝福音書」とあって、ギュツラフの標題よりも合理的である。受容者に対しての説得力も強い。ことばを変えると、ギュツラフの「約翰福音之伝」は「ヨハネの福音の伝」だというのに対し、ベッテルハイムは「ヨハネが伝えている福音の書」という積極的説得力を持っていると言えよう。

ギュツラフは善徳という漢字名を冠しているのに、ベッテルハイムは伯徳令という漢字名を持っていながらも、それを標題に冠していない。これはベッテルハイムの個人的な意識の差だけなのだろうか、漢字・漢文がすべてであるという中国本土に居たギュツラフとそうではない居住地域、すなわち精神生活の場としての文化風土の異なりに基因したものではなかろうか。そしてさらに、ベッテルハイムの時代を見る眼の違い、すなわち当時江戸幕府の反キリスト教政策に対する宗主国日本の体制下にあるという認識が、琉球の政治風土の世界であるという現実理解であったのかもしれない

い。独立国家と思っていた琉球政府が、そうではないと毎日の生活の中に侵入してくる様々な諜報活動を敏感に悟った結果であった。ベッテルハイムの細やかな気配りの然からしむるものであった。時代に対する感受性の強さでもあったろうし、伝道活動に対する信念でもあったろう。

ベッテルハイムは、中国本土の年号である「乙卯年鑄」(1885年)を標題の右肩に付し、左下に「往普天下伝福音與万民」と記して、世界の人類に与える福音だという心意気を示している。ベッテルハイムの伝道に対する心構えが伝わってくる。

ギュツラフは「約翰福音之伝」「ヨアン子スノタヨリ ヨロコビ」とあるのに、ベッテルハイムは「約翰伝福音書」「ヨハンヨロコビ タヨリ ヲタイタルショモツ。」とあって、日本語訳の文言、さらに固有名詞を示す語句に付された傍線(すべてではないが)、句・読点の記入などは、ギュツラフより進んでいる。(ギュツラフも、句点は・読点は・を付してはいる)。ベッテルハイムの表記・表現は、異文化・異言語交流によってもたらされた、日本語文章表現の近代化の一面である。

「ベッテルハイムの訳は、ギュツラフ師訳に対照させると、数段の進歩と洗練が見られるにせよ、ギュツラフの彼に対する影響は自ら顕著なものがある」<sup>6)</sup>

ギュツラフの二章以降については、それぞれの始まりに、「一節」とは別に、いわゆる冒頭の行(一節と記された文字のすぐの右側)に、「二章・三章」と廿一章まで記入し、「節」については、それぞれの「章」の次行に「一節」と記入し、他の節には「節」を省いた漢数字だけを記している。このことをさらに細かく述べると、一から九までは一位の漢数字、十から二十までは「十一～二十」、二十から二十九までは「廿一～廿九」、三十以上の節には「三十一～五十七」と記している。章の数字も同じ。

ベッテルハイムは、章の項には「第一章」と必

ず「第」の文字を冠し、すべての章に大きな漢数字で章立てを行っている。そして節の呈示はギュツラフと同じように、最初の「一節」だけは「節」を接尾させているが、他はすべて「十一」「二十一」「五十七」として、ギュツラフが使用した「廿」の和文字は使用していない。

ギュツラフの「福音之伝」の冒頭の一節には、「ハジマリニ カシコイモノゴザル・コノカシコイモノ ゴクラクトモニゴザル・コノカシコイモノワ ゴクラク。」と記している。これに対しベッテルハイムの冒頭の一節は、「ハジマリニ カシコイモノヲテ、コノカシコイモノヤ シャウテイ トモニヲタン、カノカシコイモノヤ シャウテイド。」と記している。(傍点は著者)

ギュツラフの「ゴザル」が、ベッテルハイムでは、「琉球語」の「ヲテ」「ヲタン」となり、ギュツラフの「体言止め」の文の終止に対し、ベッテルハイムは、「琉球語」の断定の助動詞「ド」で終わる。

この「ド」は、日本本土の現代共通語の断定の助動詞「だ」と意味的には同じであるが、語形は、本土の共通語形の「だぞ」である。

琉球語文化圏の一部「奄美方言」では、[zja]である。日本語の [dija→dja→da] または [ja] と変遷した語形である。「琉球語」の子音 [d] は本土方言の子音 [z] に対応することを考慮すると、ベッテルハイムの「ド」(「ダウ」とも書いている) は本土方言の「ダゾ」に対応するといってよい。すなわち、ギュツラフの「カシコイモノワゴクラク。」という体言止めの終止に、「ダゾ」または「ゾ」が接続した形として、琉球語文形に書き直されていると見なされる。

「ゴクラク」は「シャウテイ」となっていて「上帝」であり、キリスト教でいう「天地創造の唯一絶対の神」のことで「天主」「造物主」のこととなる。これもギュツラフの「体言止め」(形容動詞の語幹の一用法) に対して、「天主」(シャ

ウテイ) という体言に断定の助動詞終止形の「ド」を接続させていることは、ギュツラフより進んだ、洗練された合理的表現である。

ギュツラフは「カシコイモノワ」と表音的仮名遣いで、格助詞に「ワ」を使用し、さらに当時代の武士社会の共通語であったといわれている「ゴザル」を使っている。この「ゴザル」は漂流民たちの中に、能や謡曲をたしなむ者がいたか、さもなくばこの語形を書きことばとして知っていた、文字言語生活者が近くにいたことを示すものである。

一節は20語で1文が形成されている。この中の「琉球語」は、5語である。その割合は25%である。

二節は、ギュツラフの「ハジマリニコノカシコイモノゴクラクトモニゴザル。」に対しベッテルハイムは「コノカシコイモノハジマリニシャウテイトトモニヲタン。」となって、一節の文よりもはるかに洗練された日本語文に近い。「琉球語」的でもある。

第一章の一節から五節に使用されている「琉球語」の使用度数を見よう。

抜き出す節に格別な意味があるわけではない。筆者が勝手に取り出しただけである。

文頭の数字はそれぞれの節である。

三 バンモツアレニツクラツタン、スベテツク  
 タイルウチナカエアレガツクランモノヤヒトツ  
 ナイン。

四 アレガウチナカエイノチアテ、コノイノチ  
 ヤニンゲンノヒカリヤタン。

五 コノヒカリヤクラサニカガヤキ、タバクラ  
 サスヤコレヤワカラタン。

「福音書」の本文は、縦書きである。従って促音を示す語には、促音を示す音節の右脇に「+」の記号を付している。この記号の「+」は、音韻論上の意味はないように思う。ベッテルハイムの音声学的知覚を示していると理解される。しかし

音声の歴史的変遷とその表記の歴史上の音声学としての重要さは存在するであろう。

この促音現象は、「琉球語」の特色である。

固有名詞には傍線が付されている。地名・国名には二重の傍線、人名(聖者名)には一重の傍線が右脇に付されている。しかし付していない所もある。

次の表1は、ベッテルハイムの「福音書」に、「琉球語」がどのくらい使用されているか、既述の引用文を基にその使用度数を見たものである。

表1

節	総語数	琉球語使用度数	割合%
1	20	5	25
2	8	1	12.5
3	15	10	66
4	13	5	38
5	14	8	72

### III

ベッテルハイムの「福音書」には、日本語的ではない文章の構成が見られる。特に語順、修飾・被修飾、切れる文節にそれが顕著である。それはベッテルハイムの自国語である西欧言語文の構成の型の違いによるものであると理解される。一方ベッテルハイムが日本語訳の手本としたであろうギュツラフの「福音之伝」にも、この現象はすでに現われている。従ってこれからの影響もあったであろう。異言語を素材にした異文化の文章表現の難しさでもある。

ここでは、ベッテルハイムが西欧言語の文である「英訳聖書」を、どのように日本語化していったか、日本語訳の中にどのような「琉球語」をどのように混入させていったか、ベッテルハイムが「琉球語訳約翰伝福音書」を書くに当って、「琉球語」をどのように受容したか、異文化・異言語受

容の実像を見てみたいと思う。

主語と述語、修飾語と被修飾語、文章構成上の相違、そしてギュツラフの「約翰福音之伝」の影が、どのように落ちているかについても合わせてみたいと思う。

ベッテルハイムは、既述の通りギュツラフの日本語訳を、己れの日本語の文章表現の際下敷きにしたといわれている。従ってこの二書の語順の差はそれほどの違いはないであろうと考えられる。

自国語・自国文化ではない、異国言語・異国文化を翻訳・文章化するに当って、相当な労苦が伴ったであろうことは容易に想像される。地域の特殊性と当時の時代的特殊性を考えるとなおさらである。

最初に英訳文・Eを書き、その単語に私の訳した日本語訳・Kを、次にギュツラフの「日本語訳文」・G、次にベッテルハイムの「琉球語訳」・B、次に「文語文訳」・文、最後に「口語文訳」・口で記載する。

英訳文は『新約聖書』(1973年)

文語文訳は『新約聖書詩篇附』(1980年)

口語文訳は『新約聖書』(1973年)

英訳文の単語の日本語訳は春日の訳である。従って誤訳があるかもしれないが、文章構成上の語の順位を優先する関係から、少々のご事情は許していただけるものと思う。しかしベッテルハイムやギュツラフの訳と比較検討する場合には重要となるであろう。そのときには文語文の訳や『新約聖書』の口語訳文で補っていただきたい。

第一章一節を1-1)と表記する。(以下同じ)

	ア	イ	ウ	エ	オ
E	In	the	Beginning	Was	the Word. and
K	に	始め	あった	ことば	そして
G	ハジマリ＝		カシコイモノ	ゴザル、	
B	ハジマリ＝		カシコイモノ	ヲテ、	
文		太初に	言あり、		
口		初めに	言(ことば)が	あった。	

	カ	キ	ク	ケ	コ
E	the	Word	Was	With	God. and the
K	ことば	あった	と共に	神	そして
G	コノカシコイモノ		ゴクラクトモニ	ゴザル、	
B	コノカシコイモノ	ヤ	シャウテイト	トモニヲタン、	
文	言は	神と	偕に	あり。	
口	言は	神と	ともに	あった。	

	サ	シ	ス
E	Word	Was	God.
K	ことば	でした	神
G	コノカシコイモノ	ワ	ゴクラク。
B	カノカシコイモノ	ヤ	シャウテイド。
文	言は	神なりき	
口	言は	神であった。	

となる。

この英訳文(E)の語順と、英語訳の逐語訳日本語文(K)と、ギュツラフ(G)、ベッテルハイム(B)の語順を示すと、次のようになる。

E	アイウエオカキクケコサシス
K	イアエウオカケクキコサスシ
G	イアウエカケクキサスシ
B	イアウエカケクキサスシ

このことから、ギュツラフとベッテルハイムの語順の違いは全くない。用語上でも「G」の「ワ・ゴクラク」が「B」で「ヤ・シャウテイ」、そして切れる文節に、「ド」が付加されているだけである。

両者の用語の特色は、ギュツラフの文章語的表現、すなわち文語文的で助詞の省略、抽象的概念の表現語彙があるのに対して、ベッテルハイムは話しことば・口語文的である「琉球語」的である。「琉球語」の「ヲテ」「ヲタン」、日本語の「ハ」に対する「琉球語」の「ヤ」、さらには「ト」、そして「ゴクラク」が「シャウテイ」と固有名詞的概念の表現になっている。

文全体の構成からすると、両者とも日語文に近く、変わりはないが、ベッテルハイムはギュツラ

フの日本語訳を参照したことを示している。下敷きにしたとあってよい。

英語の「the」は、日本語形がいつでも対応するとは限らないので、カウントしなかった。

6-34)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
E	then	they	Said	to	Him.	“Lord.
K	それから	彼らは	言った	に	彼	キリスト
G	アノヒトタチ	ヒトニ	ユフタ、	カシラビト		
B	イブンニ、	ウンジウヤ				
文	彼等いふ	『主よ、そのパンを常に与へよ』				
口	そこで彼らはイエスに言った。	『主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。』				

	キ	ク	ケ	コ	サ	
E	give	us	this	bread	always”	
K	与えて下さい	我々に	この	パン	常に	
G	ワシドモニ	井ツデモ	ワシニ	コノ	モチヲトラセヨ。	
B	イツデン	ワツアアンカエ	コノ	モチ	トラキ	クイレ

語順は、

E	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ
K	ア	イ	オ	エ	ウ	カ	ケ	コ	サク	キ	
G	ア	イ	オ	エ	ウ	カ	ク	サ	ケ	コ	キ
B	オ	カ	サ	ク	ケ	コ	キ				

となる。しかし配列は難しい。

ベッテルハイムの「ウンジウ」「ヤ」「ワツアアンカエ」「トラキ」「クイレ」は「琉球語」である。「トラキ」は「トラチ」[turatʃi]である。「クイレ」は[kuiri]である。「イツデン」は薩摩人の言語である。

このような、文章として短い単文構造の文は比較対照することも可能であるが、複文・重文構造の長い文章を、比較対照するのは異言語の本質的要素から困難である。今後の課題としたい。

#### IV

「福音書」に使用されている漢字は、標題・章・節、そして章・節を示す漢数字と最後の「終」だけである。

片仮名の字源は、「ミ」の「三」、「ネ」や「ヌ」の表音仮名としての「子」それに僅かな語例に「井」が使われている。

「三・子」はすべての語に使われているが、「イ」であるべき語音に、僅かながらも「井」が使われている。この「井」はギョツラフの影響であろう。

例えば、「ワ子ヤアラン」(1-21)、「ワ子ヤアレチニ」(1-23)、「ワ子ヤ三ツシヤイアラヨルレイ」(1-26)、「フ子ノテ三ツウ三ワタテ」(6-17)、「フ子ノキテ」(6-23)、これらの「子」は「ヌ」と読めよう。

しかし、「ノヲタツ子ヨガ」(1-38)、「ワンタツ子ル」(6-26)は「ネ」である。

「ヌ」は、「ワ子ヤカラヒルノアイダカナラツツカヨルヌシノシゴトシヨン」(9-4)、「コノドロトテ三クラヒトノメニヌリツケテ」(9-6)、「ナヤエソドロ子エテワメニヌリツケテ」(9-9)と、大きい文字で表記している。一応の原則は立てているように思えるが、必ずしも一貫性はない。

「ワ子」は、「ワ・ワン・ワヌ」と同じ意味の一人称代名詞である。この一人称代名詞「ワ」は、日本上代語の一人称代名詞「吾・我」と同じ形、同じ機能を持った「現代琉球方言」にも生きている語形である。

日本の文化は「ワ(倭・和)の文化」ともいわれているように、日本の国名にもなったといわれる語である。<sup>7)</sup>

「三」は、「三ツカメムツ」(2-6)、「三ツカメ三ツ三ツテレワ」(2-6)、「三ツヤアジワイシ三テ」「三イムコヨバテ」(2-9)、「ワ子ヤ三イカアイダニ」(2-19)というように使われて

いる。

「井」の用例は僅かである。「琉球語」の「イキャガ」(どうして・いかがして)の代わりとして使われている。この「井」はワ行音の「キ」の字源であるので、「琉球語」または奄美方言で「キング」(男)、「キン」(縁)の語頭音が [ji] であることの影響である。[ji] は [i] より古い語音である。ギュツラフの用字に引きずられた結果である。

以上のような「井」の表記や、措辞、文の構成などギュツラフ的なところが多分に見られるが、異なるところもある。特に異なるところは促音の表記と、喉頭化音の認識である。

「ベッテルハイムの琉球語訳聖書は琉球人にとってや、むずかしい文語体で訳されたものであり、その上誤訳も相当あるらしい。—中略—琉訳聖書は七分は通事の手で成ったものと見なしてよく、また博士(宮良当壮)は彼(ベッテルハイム)の『琉日文典綱要』を検討した結果、チェンバレン(B. H. Chamberlain)も認めることの出来なかった琉球語特有の喉頭被裂音をそれより先ベッテルハイムが指摘していることにより、彼(ベッテルハイム)を音声学者として高く評価している」<sup>8)</sup>とあるように、ベッテルハイムは音声についての知識は深かったと見てよい。

ギュツラフはその促音表記を、連母音かまたは引き音を記号的に使っている。(ベッテルハイムも僅かな語に使用しているが)そしてきわめて不統一、不整合であったし、ときには「井」の文字も使ってもいた。

ベッテルハイムは促音便化した語形を、既述の通り促音便化語音の右傍に「+」の記号を付している。

例えば

「ウンジウヤイツデンワツタアンカエコノモチ」(6-34)となつて、「イツデン」の「ツ」には記号を付さず、「ワツタア」の「ツ」に付している。

このように音声学的微妙な音差まで認識していたということである。そしてこの「+」の記号は、ここは強く、入声音的音であるということをも示している。

「ワツタア」(1-45)、「イツキヤタ」(1-45)、「タツキ」(1-35)、

しかしこの記号の付されていない語形もある。

喉頭化音(現代の琉球方言で喉頭化音の語との関連で示す。当該語の下に傍線を付す。上の傍線は本文に付された傍線で固有名詞の語であることを示す。)の語は次の語である。

「トウテイブンニ、イヤ、モシクレストアラン」(1-25)、「イチジクノケノシタニヲタルバシヨ、ワ子ヤイヤ三タン」(1-48)、「エソコタヘテイウニ、ワ子ヤイチジクケノシタニイヤ三タンディツヤルユエニイヤ、シンズトウ三」(1-50)、さらに「イヤ、シイシンクダテ」(1-33)、「エソコレ三テぐワイウニ、イヤ、スモン、ヨナガクワ、イヤナケハンデツケラレン」(1-42)、「エソコタヘテイブンナカエ、イヤ、イスラエリヒトノシ、ヨウ、コノコトシラ子」(3-10)、そしてまた「ソヤウヘントシイブンニ、イヤン」(7-51)、「フルマイノツカサドリサケトナトウル三ツヤアジワイシ三テ、キヤシナタラシラン」(2-9)、「子コデモコタヘテイブンナカエ、コノコトヤキヤシナヨカ」(3-9)、「ドウノウイニノヲイウガ」(1-22)「ワ子ヤシイシン、スガタハウトニニレラ、テンカラクダテ、アレガウイニトマヨス三タン」(1-32)、「シンシンクダテ、ウイニトマトウス三、ヨスヤ」(1-33)、と書かれている。下の傍線部分がこれに当る語で、音声記号は次のように記述される。

{?ja}、{?jaja}、{?jan}、{?kjaʃi}、{?ui}、である。

(1-42)の「クワ」も{?kwa}である。「シヤウテイノクワトナヨン」(1-12)、この「クワ」は、「テンノチ、ノウマラキヤイル ヒト



リムスコノ」(1-14)の右傍には、「ヒトリングワノ」と記している。

このように一つひとつ書き出せばきりが無い。それは喉頭化音だけではなく、「琉球語」を表記する文字の規準のない当時において、よくぞここまで表記・表現されたものだと思う。特にこの喉頭化音の記述は、ベッテルハイムの音声学的素養の深さではあるが、薩摩や琉球政府差し廻わりの間者の看視の中で、よくも聞き分けたものだと思う。ベッテルハイムを、〔ʔu tʃi na waq tʃu〕から見て、国と国との関わりからすればいろいろ迫害を受けたであろうけれども、個人と個人との立場では、嫌われていたとは思わない方がよいかもしれない。恐らくベッテルハイムの人柄が、いかに沖縄の人達に好かれていたか、民衆の中で沖縄の人達と楽しく、しかし片ことの島グチで語りあっているベッテルハイムの姿が髣髴されるものである。

## V

前項の用例(1-48)、(1-50)の波線の語「ケ」は〔ki〕であろう。恐らく〔ki〕という乙類の母音音節の音を表記する音節文字がなかったので、「ケ」という表記をしたものと思われる。

同様に前項(2-9)の用例の語「ツカサドリ」は「司祭」のことで、「司加那志」「ツカサガナシ」である。<sup>9)</sup>

また前項(1-32)の波線の語「ハウト」は「鳩」のことである。語中の音がウ音便化している。これは京都方言に近い語音であることを示している。

また「エソハボリノヤマンカエイデヤン。スト三テマタテラニモドヨルバ、タ三ノキヤアアレンカエツキヲツコト、ツイニエイキヲシヘガタシヤン。」(8-1・2)は「イエスはハボリの山にいかれた。翌朝、朝早くまたイエスは寺に戻られた

ので、民の者達はイエスの所について来て集まった。そこでイエスは(坐って)教えることにした」と訳されるが、ここの「スト三テ」は、『枕草子一段』の「冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、」<sup>10)</sup>の「早暁」「早朝」「つとめて」に対応する語形である。この語形は「jitimiti シティミティ」で琉球地域ではそう古い層に属する語でもない」とされて、「琉球全域に広がった古い層の語はスカマ系である。そこへストメテ系が沖縄中南部から入って、その周辺へ広がり、さらに首里王朝の権力を背景に宮古・八重山・与那国へ南下していった」<sup>11)</sup>とあり、さらに「スカマの語源はよくわからない」とも述べ、さらに「琉球語の祖形は\*sutometeであり、『つとめて』でなく、ストメテの形が採り入れられたようである」<sup>12)</sup>と述べている。

ベッテルハイムの「スト三テ」の「三」は、〔me〕ではなく〔mi〕であることを示していることから、日本本土語の〔e〕が「琉球語」では〔i〕になるという母音対応、するわち「琉球語」の基本三母音は「a・i・u」で「日本本土語」の〔e>i>〕をじゅうぶん認識していることを示している。

「アレワカトキヨフスガ、モトヨリワンヤカサチヲタン、アレガサバノヲ、ハンシヨスマデワニヲウズラン。」(1-27)

「あの人は私より後に来られるのですが、もちろん私よりも先にいた方(来るべき)です。(そして)その人がサバの緒(紐)をはずすまで私はお待ちしましょう」という語釈が出来るが、この「サバ」は履きものことで、日本人の「草鞋」・「草履」のことである。

「サバ」は、竹・藁・棕櫚・アダン・藁・で編んだもので、滑らないという特徴がある。竹とか藁、ときには棕櫚で編んだものがあるが、これらは高貴な人の履くものとして数が少なく高価である。一般的に百姓や漁師(磯での漁)達は藁で編

んだもの（老婆達が夜なべ仕事として編む）を使い、潮干狩のときによく使ったといわれている。

「サバ」の語源は、正確には分からないが、奄美・請島の老婆（サバ造りの名人）は、「サバ」の形、特に鼻緒の形と、「サバ」の先端が鮫の前頭部に（特に「サバ」の鼻緒の部分が鮫の目のある頭部に）似ているから命名されたという。この島では鮫のことを「サバ」といっている。

以下「琉球語」形の語を羅列する。

「アタトウ」（4-17）、「アラン」（4-18）、「アランカヤ」（4-29）、「アマニ」（4-46）、「イウル」（4-26）、「ウンジウ」（4-49）、「ウシヤガテクイレ」（4-31）、「サヌ」（4-36）、「シテラン」（4-42）、「ドウシヤイ」（4-44）、「トマタン」（4-40）、「ナマ」（4-18）、「ナラアション」（4-25）、「ナテ」（4-35）、「ナエモン」（4-36）、「ニヤ」（4-35）、「ノデ」（4-12）、「ハナシヨス」（4-27）、「ヒキ」（4-1）、「マガ」（4-12）、「マジヨン」（4-40）、「ミシヤウレ」（4-49）、「ムラ」（4-28）、「ヤニンジヨン」（4-53）、「ワツタア」（4-12）、「ヨガダン」（4-20）、「ヨガデ」（4-47）、「カデ」（6-25）、「カマシヨツ」（6-23）、「チカサンカエ」（6-23）、「テンカラ」（6-31）、「ノクトウル」（6-12）、「ムカテ」（6-17）、「ヨタン」（6-3）、「ヨラン」（6-24）、「キモ」（2-25）、「ムナ」（2-3）

#### 和語の語形

「アジワイ」（2-9）、「イツワリ」（1-47）、「シャカイノイツワリ」（8-44）、「カシラ」（3-1）、「スベテ」（3-8）、「ナニガシ」（3-1）、「ナンゾ」（1-48）、「ハ、ノハラ」（3-4）、「ホンノマコト」（3-3）、「マサシキゴト」（3-6）、「キヨリ」（3-1）、「ムマノトキ」（4-6）

#### 薩摩語の語形

「ヨナゴ」（8-3、4、5、9、10）、「イイドンス」（8-55）、「ユキヨルバ」（9-1）、「イツ

ヤコト」（9-10）、「トウトキンド」（9-21）、「ボンヤガアニ」（9-27）、「シテラスガ」（9-29）、「ヨツコト」（2-25）

#### 混種語

「モトノヤニカエタン」（7-53）、「コノヲナゴ…カラメラツテ」（8-4）、「マタウツシキヂダニカキヤン」（8-8）、「ドウクルドウ」（8-13）

次のような語形も見える。

「マサニワンツカタイルカ三チ、ノヲヘセダウ」（6-39）、「コレンマタフンツカヨルモンノシイノヲヘセダウ」（6-40）

この用例の下線部波線の語は、「仰せ」である。

また、「ハヒコセエイヒ、ノバエソエルサレムナカエヲタン、タントニンゲンアレガシヤルフシギナコト三テ、ソノナシンズタン。」に示されている「タント」などがある。

「アレニシンズルモノヤトガ<sup>+</sup>サダメラン、タビシンズランモノヤトガ<sup>+</sup>ハスデニサダメラツタイン、<sup>+</sup>という語形もある。

さらに「ビヤウニシタチマチニナヲテ、子グカ<sup>+</sup>タメテハキヤン。ソレアノヒヨコヨルヒヤタン。」（5-9）に、「カタメテ」は「荷ついで」であるし、「ヨコヨルヒ」は「横になる・安息日」という意味となる。奄美方言では、「ヨコニナル」とは「体を休めて横になる」という意味で使われている。

#### あとがき

本稿は、本学部史学科の吉田 寅先生から資料のご提供をいただいたのがきっかけである。

また、異文化交流についての調査・研究を奨めて下さったのは、昨年三月に本学部史学科をご定年ご退職なされた木崎良平先生である。両先生にまず感謝の意を表する。

本稿をまとめるに当たって、多くの文献を利用した。引用した文献はここに注記して感謝の意に代

える。特に「法政大学」の「沖縄文化研究所」では貴重な資料を見せていただいた。

IとIIは、『近代文学研究叢書第一巻』の「B・J・ベッテルハイム」と『日本キリスト教史事典』の「ベッテルハイム」に負う所が大きい。記して謝意に代える。

#### 注

- 1) 東条 操『方言と方言学』(昭和13年5月 春陽堂)
- 2) 金城朝永『世界言語概説』(下)(昭和30年5月 研究社)
- 3) 宮良当壮「琉球方言」(『雑誌国文学・解釈と鑑賞』1954年6月号)
- 4) 『近代文学研究叢書第一巻』(昭和女子大学近代文学研究室・昭和53年6月)「B・J・ベッテルハイム」
- 5) 『琉球年代記』(16「譜厄利亞の人」)(法政大学沖縄文化研究所蔵)
- 6) 注4に同じ
- 7) 大槻文彦『大言海4』(昭和19年11月 98版富山房)
- 8) 注4に同じ
- 9) 『沖縄古語大辞典』(1994年6月 角川書店)
- 10) 『枕草子』(『日本古典文学大系19』昭和33年9月 岩波書店)
- 11) 中本正智『図説琉球語辞典』(1981年11月 力富書房金鶏社)